

「通常学級からみた、滋賀大キッズカレッジの指導理念・方法と子どもの発達」

指定討論 滋賀県公立小学校教員 石垣雅也
(臨床発達心理士・教育科学研究会全国委員)

1：通常学級における指導のトレンド

① 特別支援教育における支援と指導方法が、視覚支援・構造化・ソーシャルスキルトレーニングに集約。
→ 視覚支援、構造化の必要性はある
(子どもを動かそうとして大声張り上げるだけではない方法)

② ○○スタンダードを通じた「学習規律」重視の指導と校内研究と教師評価

i：学校における「学習規律」重視の背景

(1) 規律訓練の場として要請される学校

i：06改定「教育基本法」第6条2

ii：中央教育審議会 2005年第33回34回資料
学習習慣や学習規律を確立すること。

(2) 「テスト収斂システム」に組み込まれる「子ども・教師・学校」

金馬国晴「「テスト収斂システム」が教育を壊す」（教育2014年10月号）
「テスト収斂＝すべてのものがテストのため」

校内研修で語られる「子どもの実態」「子どもの姿」は学・学調査の結果（＝テストのため）というメガネを通して見た「子どもの実態」「子どもの姿」の把握でしかなくなる

② の i：ii は相互補完的に「教育の質」をその文脈において規定する機能を果たす。これらは、子どもの実態、子どもの発達の姿を出発点に置かない。

「教育専門性と学習の事実と交代に存在感を増しているのは、評価・比較・分類が有する客観性の教育のスタンダードと達成目標の訴求力である」勝野正章「教育の質保証と、教育行政の中立性」（教育2015年9月号）

2：通常学級における発達障害児とその周辺

見えやすく、課題として上げられやすい発達障害児の姿と、見えにくく課題として上げられにくい発達障害児の姿。

子どもの学習の現実、子どもが感じている困難に対して、通常学級における指導のトレンドは対応していない。(隠蔽される)

3：教育科学研究の課題と、滋賀大キッズカレッジの指導理念・方法への期待～「外形的かつ操作主義的指導」が主流を形成する中で

教育科学研究会発行の月刊誌「教育」（かもがわ出版）においては、この間、学力テスト体制、ゼロトレランス、スタンダード化などに対しての批判的検討を行う特集が精力的に組まれてきた。競い競わされ追い立てられる教育政策の中で、教師も子どもも追い詰められている現状がある。それらへの「抵抗線」をどこに求めるのかということが課題として意識化されている。その中で、滋賀大キッズカレッジの指導理念・方法に大きな期待を私はよせている。

以下2点の期待と1点の課題を記す。

①：子どもの存在・発達に対する信頼

＜キッズカレッジの実践的経験＞

困難を自覚した子どもがその困難に向き合いに学習室へやってくるという事実。

＜発達障害の子ども「本質」の提起＞

まじめ・やさしい・がんばりやさん

②：その信頼が、「外形的、操作主義的指導」の上手下手で評価される学校現場の、若い教師たちの育ちと学びを励ましている

「気になるこの指導に悩むセンセのための学習会」からの「つまずき研究会」

③：「教師にとどく言葉」を磨きあげる

指導者があれこれ指図しないということ＝指導放棄ではない。むしろ、子ども自身がその困難な課題に向き合うために、子ども自身の力でやり遂げることを「指導」しているのではないか。指導者が口出ししないことを「教えない」としているが、子どもは学習している。教えること抜きに子どもの学習が成立するという経験は通常学級の教師には理解が難しい感覚ではないだろうか。

しかし、実はこの点こそが「外形的、操作主義的指導」への対抗軸たり得ると考えている。

この点においては、滋賀大キッズカレッジの実践的経験・理論的到達と、学校教育や教育学相互の対話の中で、子どもの学習発達を子どもの目の前で支える「教師にとどく言葉」として磨き上げていってもらいたい。